地球環境部門―パネルディスカッション（1）

「聴竹居」から学ぶ、日本の季節を味わう住みこなし術

［資料あり］

9 月 12 日（火）9:00～12:30　オンライン 第 L 室

司会　　齊藤雅也（札幌市立大学）
副司会　廣瀬和徳（教育環境研究所）
記録　　佐々木優二（北海道立総合研究機構）

1.主旨説明　西川竜二（秋田大学）
2.主題解説
❶聴竹居からいま改めて「建築計画原論」を考える
　　宿谷昌則（東京都市大学）
❷藤井厚二が追求した日本の住宅の理想形と聴竹居の住みこなし術
　　松隈　章（竹中工務店／聴竹居倶楽部）
❸現代住宅の夏の困りごと・住みこなし術
　　田中稲子（横浜国立大学）・谷口　新（大妻女子大学短期大学部）
❹現代住宅の冬の困りごと・住みこなし術
　　高橋　達（東海大学）・中島裕輔（工学院大学）
3.討論　　進行：齊藤雅也（前掲）
　　コメント：村田昌樹（OM ソーラー）
4.まとめ　菅原正則（宮城教育大学）

いま日本の住宅は、2050 年までの脱炭素社会の実現に向けて、新築住宅への省エネ基準の完全義務化、ZEH の普及の潮流の真っただ中にある。しかし、昨今の断熱気密化と省エネ・再エネ設備による省エネ住宅づくりが先行するのに対し、脱炭素かつ日本の地域の春夏秋冬の自然・文化を愉しむ住宅のあり方、居住者の住みこなし方についての議論や普及は軽んじられているかにも見える。そうした中で、本パネルディスカッションを企画する環境ライフスタイル普及小委員会では、住宅の環境調整技術と住みこなし方の研究・普及をテーマに活動し、その成果として「季節を味わう住みこなし術」を昨年に刊行した。

今回、大会が開催される京都の地に目を向けると、約 100 年前に、建築環境工学の源流ともいわれる建築家・藤井厚二（1888-1938）が京都大学に在職し、当時の最先端の科学・技術を凝らした今でいう環境共生型住宅ともいえる自邸「聴竹居」(1928) がある。藤井は、意匠と環境の実務者・研究者、そして住まい手として、当時の住宅の欧米化の潮流の中で、

日本人の生活習慣・文化や感性と日本の気候に適した「日本の住宅」の理想を追求し、実に5回目の自邸として聴竹居を完成させた。また、藤井が欧米を視察した当時はスペイン風邪の世界的流行があり、住宅の防寒と共に換気も重視していた点や、住宅の室内気候の改善による季節性の死亡率増加（当時は夏の死亡率が高かった）の抑制を考えていた点も今の時代と合致している。

本パネルディスカッションでは、聴竹居を舞台に、約 100 年前に藤井が追求した「日本の住宅」の思想と聴竹居での実践、現在の住宅の解説を踏まえ、今後の環境共生時代の「日本の住宅」の方向性について、「もし藤井が現代に生きていたらどう考えるか、聴竹居をどう改修して住みこなすか」を手掛かりに探っていきたい。